

## ストックホルムセンタ だより 第6号

### 1. はじめに

2004年4月より刊行開始してきた「当センターだより」は、今月号で本年度最終号を迎えました。刊行の度に読者の方から感想やコメントをいただき、編集部一同嬉しく思っております。来年度からは新メンバーとなりますが、引き続き内容を充実させて現地情報の発信を継続する予定ありますので、今後ともお気づきの点や掲載記事のご要望がありましたら、お気軽にご連絡ください。(水田・土屋)

### 2. センタ - の行事

#### 2月11日(金) “JSPS Alumni Club in Sweden” 同窓会総会&第1回セミナー - の開催



参加者一同

(会場 Sheraton Hotel, Room St. Erikssalenにて、下段、左より岡崎センタ - 長ほか役員)

(短期)事業、二国間交流事業経験の幅広い年齢層のOB&OGが24名が、スウェーデン全土から、参加しました。冒頭、岡崎センタ - 長の挨拶後、水田事務官によるスウェーデン語での当センタ - の概要説明があり、続いて、土屋研修生より第1、2回幹事会の結果を踏まえた活動の進捗状況の報告を行いました。

2005年2月11日(金)10:00より、ストックホルムのシェラトンホテルにおいて、スウェーデン在住のJSPS事業経験のOB&OGを対象にした同窓会総会&セミナー - を開催しました。

今回の総会は、昨年1月の全体会合に続く第2回目の開催で、総会にて1)当センタ - 概要説明と同窓会支援活動の進捗状況の報告、2)会則の決定、3)役員選出、4)参加者の自己紹介とフリ - ディスカッションを行いました。午後からは第1回セミナー - 「日本における高等教育(講師:水田事務官)」を実施しました。本総会により、同窓会を正式に組織化すること、会員の間さらなる気運の醸成を図るなどが達成されました。

当日は、外国人特別研究員事業ほか、外国人招へい



(「スウェーデンの同窓会活動の進捗状況」について説明を行う土屋研修生)

#### 【総会における合意事項】

##### (1) 会則について (詳細内容は省略)

原案どおり合意。

##### (2) 役員を選出

ChairのMa Li Svensson氏、Vice ChairのCarlos A Rubio氏含む下記8名を正式な役員として決定。

Dr.Ma Li Svensson(Linkoping University)  
 Prof.Carlos A Rubio(Karolinska Institute)  
 Prof.Stig G Allenmark(Goteborg University)  
 Prof.Jan Sedzik(Karolinska Institute)  
 Prof.Magnus Larson (Lund University)  
 Prof.P. Ake Oberg (Linkoping University)  
 Prof.Ulla Westermark(Lulea University of Technology)  
 Prof.Lembit Sihver (Chalmers University of Technology)

その後、会則については、水田事務官より主に第1条(名称)から第10条(総会の権限)までの概略説明を行い、原案どおり合意されました。

続いて、役員を選出を行い、昨年の幹事会で選出された暫定役員8名のうち、辞退者1名を除く7名が役員として承認されました。欠員の1名は、その場でコンタクトパ - ソンの Prof. Lembit

Sihver氏が立候補すること

とで、計8名が正式に役員として決定されました。

コ - ヒープレイクの後、参加者24名から各々1~2分程度の自己紹介があり、参加者の中には、OHPを使用し、JSPS事業での渡日



(フリーディスカッションによる意見交換の様子)

経験談を発表する積極的なOBもいました。

その後、フリーディスカッションを行い、同窓会活動(ホ - ムペ - ジ、ニュー - ズレタ - の掲載内容、コンタクトパ - ソン活動、次回セミナ - 内容等)について、メンバ - 間で、率直な意見交換を活発に行うことができました。

総会終了後、12時より同ホテルの別会場「Hagasa longen 1」において、参加者によるランチレセプションを行いました。各参加者は寿司や天ぷらなどの日本食を食べながら、互いのバックグラウンド、渡日経験、日本文化など様々な話題に花を咲かせ、和やかな雰囲気の中、参加者間の懇親を深めることができました。



(第1回セミナ - 「日本における高等教育」についての説明を行う水田事務官)

引き続き、13時15分より第1回目のセミナ - として、水田事務官より「日本における高等教育について」のプレゼンテーションを行い、社会的背景にともなう近年の高等教育の推移や独立行政法人化後の大学改革の現状や今後の課題等の説明がありました。説明後は活発な質疑応答が繰り広げられ、両国の高等教育についての熱心な議論が行われ、会場はアカデミックな熱気に包まれました。

スウェ - デンの同窓会は、昨年1月末の全体会合以来、ウェブペ - ジの開設(コンタクトパ - ソン情報掲載)、ニュー - ズレタ - の発行、暫定役員を選出、会則の原案作成等を通じ、瑞日の学术交流と組織化が進んできましたが、今回の総会において、会則と正式な役員が決定することで、本格的に、同窓会組織がスタートすることとなりました。

今後とも、会員の意見を踏まえて、引き続き、役員と協力して同窓会を支援し、個々の同窓会活動内容の充実を図ることにより、瑞日間の継続した研究者間のネットワークが構築されるよう努力したいと思っています。

さらに、同窓会支援活動の対象国の拡大を念頭に、将来的には、活動対象国をスウェ - デンから北欧地域まで発展させていく方向で、当面は積極的な元フェロ - が中心的な役割を果たし得る国から、当センタ - でも同窓会設立を支援していきたいと思っています。(土屋)

### 3. ニュ - ス & トピックス

今月はニュースとして1) 日瑞研究協力の枠組み拡大の様子、2) 北欧研究委員会の設立、3) スウェ - デンの学力低下について、トピックスして「スウェ - デンにおける外国語教育」について(以下執筆: 水田) 取り上げてみました。

#### 日瑞研究協力の枠組みが拡大

##### (1) 理研とカロリンスカ研究所が包括的協力協定を締結

独立行政法人理化学研究所(野依良治理事長)とカロリンスカ研究所(ハリエット・ヴァールベリ - ヘンリクソン学長)は、両研究所で行われている生医学研究分野についての研究協力を包括的に進めることに合意し、2004年10月に包括的協力協定を締結しました。理研は、カロリンスカ研究所とは、従来からゲノム科学分野で理研横浜研究所・ゲノム科学総合研究センターとが協力関係を持つなど、一定の協力関係がありましたが、今回の包括協定を締結することで、両研究所の協力関係を一層強化・拡大し、生医学分野に関する研究を一層発展させることを目的としています。

理研にとっては、2003年10月の独立行政法人化後、海外研究機関との包括的協力協定を結ぶのは初めてですが、今後、海外の代表的な研究機関との研究協力・連携を強めていくこととしています。今回の協定の内容は、以下のものを含んでいます。(水田)

- ・ 協力の形態(研究者交流、情報交換、研究材料交換、共同プロジェクトの実施)
- ・ 共同プロジェクト等の実施(個々の協力活動実施のため、特定協定を作成)
- ・ 成果の発表・知的所有権(成果発表は原則共同。協力活動の結果生じる成果及び知的所有権の取扱いが特定協定で規定)
- ・ 協定有効期間(双方署名後5年間、延長可能)

(独立行政法人理化学研究所のホームページ(プレスリリース)参照:

<http://www.riken.jp/r-world/info/release/press/2004/041026/index.html>)

## (2) JST が VINNOVA 及び SSF と「戦略的国際科学技術協力事業」を実施

独立行政法人科学技術振興機構（JST）は、スウェーデンの技術革新庁（Swedish Agency for Innovation Systems: VINNOVA）及び戦略研究財団（Swedish Foundation for Strategic Research: SSF）と協力して、日瑞研究交流の共同支援のための新たな枠組みを構築し、課題の募集を行いました（平成 16 年 12 月 20 日～平成 17 年 2 月 15 日）。

これは、「戦略的国際科学技術協力推進事業」の一環として、平成 16 年度は、「ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域（Multidisciplinary BIO）」につき協力を実施すると文部科学省の通知を受けてのものです。

ライフサイエンスと他の分野を結合した複合領域は、ライフサイエンスと工学、物理学、コンピュータや数学のような他の分野を結合した研究領域で、2 つの補完的な関係にあるライフサイエンスに関する専門分野を結合した領域を含むものです。

具体的には、上記 3 機関が協力して比較的小規模な共同研究を支援していく予定です。（水田）

（独立行政法人科学技術振興機構のホームページ参照：<http://www.jst.go.jp>）

## ○北欧研究委員会（Nordic Research Board）が設立される

2005 年 1 月 1 日に、北欧教育科学閣僚会議により、同会議の下の独立機関として、「北欧研究委員会（Nordic Research Board：NRB 又は現地語で NordForsk）」が設立されました。

同委員会は、北欧諸国の中心的研究助成機関間の協力を促進するための組織的枠組みとなるもので、各国共通の利益を追求するための共同研究等に関する北欧閣僚会議の研究予算を調整・配分する機能を有しています。

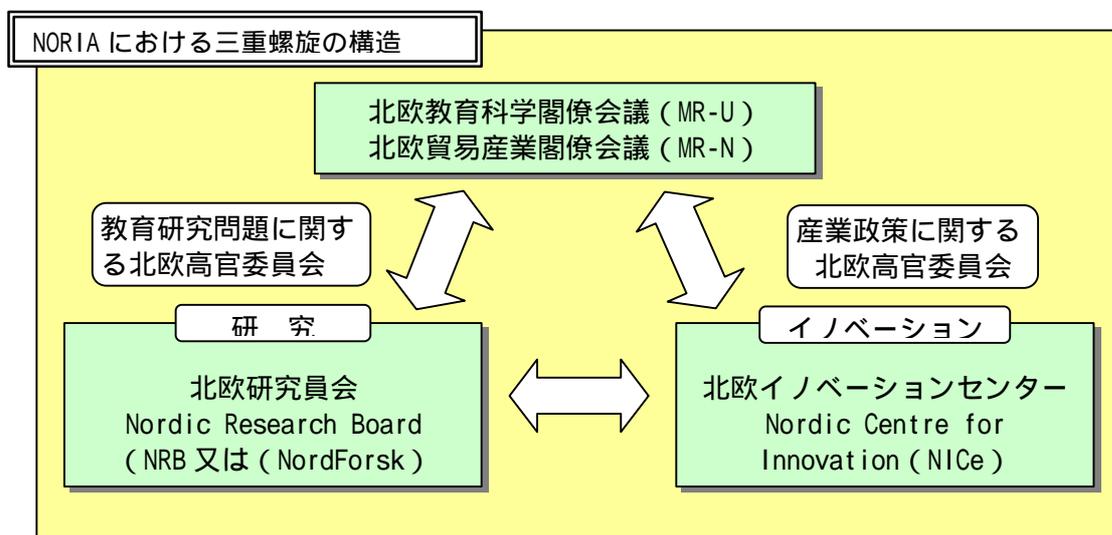
同委員会は、北欧各国のリサーチカウンシル等の研究助成機関及び大学を中心として、従来あった「北欧研究評議会（FPR）」及び「NorFA（Nordic Academy for Advanced Study）」の業務を継承し、調整（各国間の大規模プロジェクト等）、助成（北欧 COE プログラム等）、政策（研究・イノベーション政策についての提言等）などの活動を行うこととされています。2 月 9 日に行われた第一回の役員会議において、会長には、デンマーク戦略リサーチカウンシルの Lene Lange 博士が、副会長には、フィンランドアカデミー副会長の Anneli Pauli 博士が選出されました。その他の役員としては、スウェーデンからは、リサーチカウンシル副事務局長の Gunnel Gustafsson 博士及び北欧地域の大学からの代表の 1 人として、ウプサラ大学長の Bo Sundqvist 博士が入っています。

2005 年の予算は、7600 万 DKK で約 14 億円となっています。

なお、北欧地域の研究協力については、2003 年に北欧教育科学閣僚会議から公表された「ホワイトペーパー」及び 2004 年に北欧貿易産業閣僚会議から公表された「イノベーションペーパー」を基に、「NORIA(Nordic Research and Innovation Area)」の構築が目指されており、北欧閣僚会議の下、研究分野では上記「北欧研究委員会（NRB 又は NordForsk）」が、イノベーション分野では「北欧イノベーションセンター（NICe）」が中心的な役割を果たして行くこととなります。

このような北欧地域全体としての研究協力にも注目し、フォローをしていきたいと思えます。（水田）

（北欧研究委員会のホームページ参照：<http://www.nordforsk.org/index.cfm?&lid=3>）



## ○スウェーデンでも学力低下が話題に

2004年12月に公表されたOECDのPISA及びIEAのTIMSSの結果について、スウェーデンにおいても、子どもの学力低下が話題になっています。特に、数学及び自然科学の学力低下が顕著であり、PISAではOECD諸国中それぞれ12位及び10位、TIMSSでは、前回(スウェーデンは1995年)の調査と比較して、低下幅が両調査に参加した国16カ国中で最大であったことが報道されています。

この結果について、学校庁のペール・トゥルベリー事務総長は、「予想以上の悪化である。現行の学習指導要領の見直しが必要かどうか調査する必要がある。」とコメントしている一方、バイラン初等中等教育担当大臣(注:統括の教育・研究・文化大臣はバグロツキー大臣)は、この学力低下は、1990年代に学校が経験した大規模な経費削減のためであると分析している。

また、生徒の規律も悪化しており、特に生徒の遅刻はOECD加盟国30カ国中最多で、調査前の2週間に少なくとも5回以上遅刻した生徒が1割以上もいたことが大きく報道されている。落ち着きのない生徒、授業を中断する生徒も増えているとのことである。授業中の携帯電話の使用も問題とされており、バイラン初等中等教育大臣は、「学校に授業の妨げとなるものを生徒から没収する権限を与える法改正を考えている。」とコメントしています。(水田)

(Dagens Nyheter 2004年12月7日10面、Svenska Dagbladet 12月7日7面、14日参照)

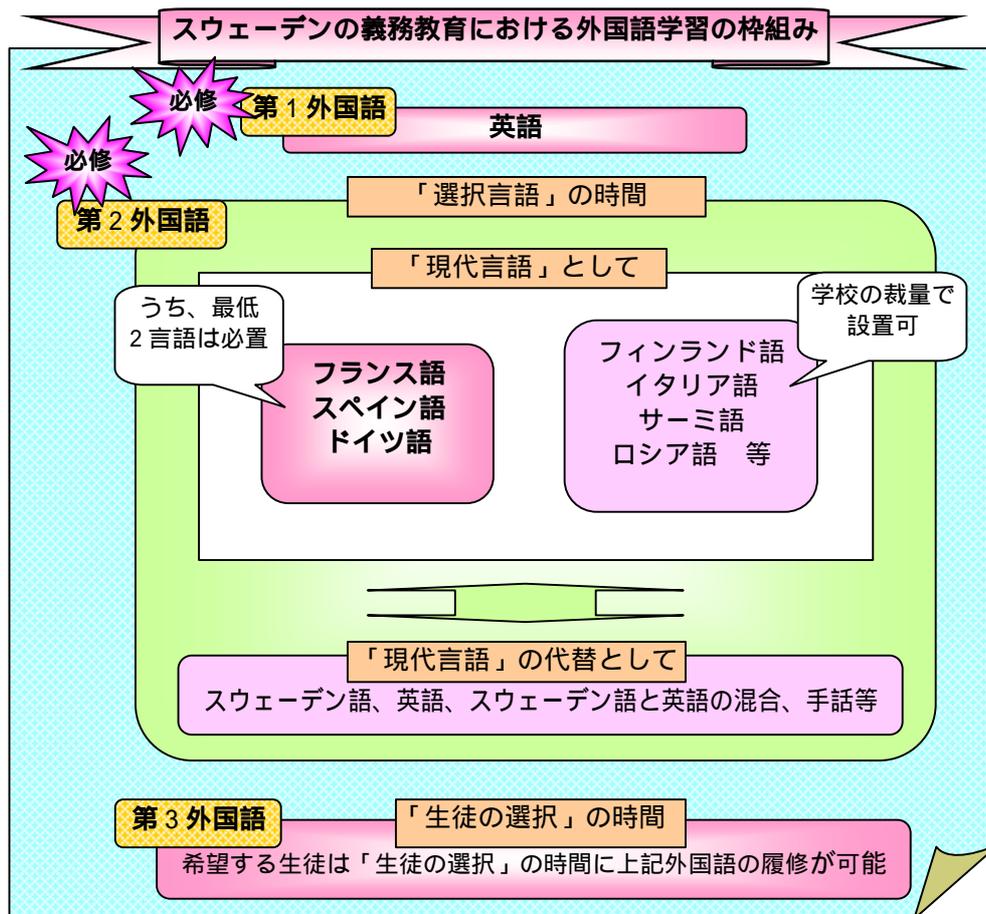
## ○データから見るスウェーデンにおける外国語教育

スウェーデン人は、英語を話す国民の率が高く、かつ上手なことで有名です。実際にも、現役で仕事をしている年代の方は、ほとんどが英語を話せるといっても過言ではないかもしれません。これには、テレビが、子ども向けのものも含め、米国や英国の番組や映画を原語のまま放送しており、小さい頃から自然と耳が慣れていることや、900万人と人口が少ないため、常にグローバルな視点から教育や経済活動が行われており、小さい頃から英語やその他の外国語の習得が不可欠であるという認識が自然に備わっていることなどが良く言われています。このような背景の下、教育の現場では、外国語をいつ頃からどんな言語を勉強しているのか、若干の制度の説明を加えながら最近のデータを紹介します。

データを紹介する前提ですが、スウェーデンの学校では、基礎学校である7歳から16歳までの9年間の義務教育の中において、国の学習指導要領は各教科の9年間の総必要授業時数を示すのみで、各教科を何年生でどれくらい教えるかは各学校の裁量に委ねられています。なお、この基礎学校は、必ずしも9年生の1つの学校ではなく、コミューン(市)によって、6+3制や5+4制など、いくつかの段階に分けているケースが多いようです。

まず、必修の英語については、10年ほど前は、3年生又は4年生から学習を開始する児童が過半数でしたが、2002/03学年度で見ると、1年生から開始している児童が3分の1に当たる33%、2年生からの開始は14%、3年生からの開始は39%となっており、86%の児童が3年生までに英語教育を開始しています。4年生の開始が12%ですので、これを合わせれば98%になります。この傾向は、公立学校とフリースクール(コミューンの運営ではなく学校庁の認可によって設立されるが、児童生徒数に応じた教育費がコミューンから支払われ、授業料の聴取は禁じられている)との違いも出ており、フリースクールの場合には、56%の児童が1年生から英語を学習しています。(本記事の基となる統計は、学校数ではなく、児童生徒数で数えておりますのでご了承ください。)

英語以外の外国語については、各コミューンは、「現代言語」として、フランス語、スペイン語及びドイツ語の中から少なくとも2言語を選択肢として提供する義務を負っています。この3言語以外にも、フィンランド語、イタリア語、サーミ語(ラップランド人(サーミ)の言語)、ロシア語等を提供することが可能です。これら、「現代言語」の授業の枠組みの中で、生徒は、「現代言語の代替科目」を選択することも可能となっています。その中には、スウェーデン語、英語、スウェーデン語と英語の混合、手話等が含まれています。さらに、第3外国語を勉強したい生徒は、「生徒の選択」という枠組みがありますので、そこで、例えば、フランス語を現代語として選択した生徒がドイツ語をさらに勉強することも可能となっています。文章ではわかりにくいので、図にすると以下ようになります。



データによれば、5年生までの間は、ほとんど第2外国語の学習はありませんが、6年生になると、79%が選択言語の時間があります。主要3現代語については、以下のような選択状況となっています。

### スウェーデンの義務教育における第二外国語の選択状況（2002/03 学年度）

（各学年の男女各総数に占める各言語選択児童生徒の割合）

	ドイツ語		フランス語		スペイン語	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子
6年生	20	24	18	13	23	21
7年生	29	34	24	16	29	25
8年生	29	32	25	15	24	18
9年生	30	30	24	13	17	13

全体としてはドイツ語の人気の従来同様高くなっているものの、近年は、スペイン語の人気の高まっているようです。7年生では、女子、男子をそれぞれ合計してみると、この3言語を第2外国語として学習している生徒が約80%近くと多くなっていますが、9年生になると60%近くに減少しています。この3言語を選択しない残りの多くの生徒は、「英語」又は「スウェーデン語と英語の混合」という授業を選択しているとのことで、高校入学のための唯一の資料となる成績（注：高校入学に当たっての選抜試験はなく8年生から付けられる成績が判定材料となります。）をにらんで、「第2外国後よりもまずは国語と英語」という選択をする傾向が現れてきているようです。

また、男女別に見ると、女子の方が全体的に、この3現代語を選択する率が高くなっています。また、男子がドイツ語を選択している割合が大きいのに対して、女子は、フランス語もスペイン語もほぼ同様に選択しています。

以上のように見てくると、一言で言えば、「スウェーデンでは、英語の学習のスタートは早く、約3分の1が1年生から、遅くとも4年生にはほぼ全員がスタートしているほか、日本でいう中学生になると第2外国語の選択も開始し、ドイツ語、フランス語又はスペイン語を主として履修、さらに第3外国語の選択も可能となっている。」と言えますが、上述のように、国語と英語の成績確保のために、

第2外国語の履修者は最終学年に近づくとも減少する傾向にあり、学校庁はこの傾向を憂慮していることは付言しておきたいと思えます。

スウェーデンでは、教科書を含む教材の選択を含めて学校現場の裁量が大きくなっており、実際の教育内容・方法については、語学に限らず実に多様ですので、本稿においては、特に履修状況の統計から申し上げられることを中心にご紹介致しました。(水田)

(学校庁: Descriptive data on childcare, schools and adult education in Sweden 2003  
統計局: Education in Sweden 2003 参照)

#### 4. \* JSPS Alumni Club in Sweden 同窓会会員のインタビュー特集

センタ - だより第4、5号に引き続き、2005年2月に実施しました\* JSPS Alumni Club in Sweden 同窓会会員のインタビューを特集します。(土屋)

##### 2月23日(水)第7回\* JSPS Alumni Club in Sweden 同窓会会員へのインタビュー

今年度は、7月~9月にかけて同窓会の暫定役員を中心に6名の同窓会会員のインタビューを実施してきましたが、今回は、同窓会会員のうち2月11日の総会に出席し、活動に好意的なコンタクトパ - ソンで、唯一の社会福祉専門の会員を訪問し、主としてJSPS事業を通じての日本での調査経験のインタビューを実施し、JSPS事業内容の満足度や調査の成果、両国の高齢者介護、社会保障制度等の比較、同窓会活動についての意見交換を

##### (参考 インタビュー項目事項)

- ・ JSPS フェローシップ事業について (事業内容の満足度や研究成果等)
- ・ 瑞日の高齢者介護、社会保障制度、介護サ - ビス従事者の労働環境等について
- ・ 日本での生活や日本の社会・文化、慣習について
- ・ 同窓会支援活動について

を行い、第4、5号に続き「当センターだより」に掲載することで、日本の学術関係者に広く情報の提供を行い、瑞日交流の一層の活性化を目的として実施しました。  
なお、インタビューの形式は、事前に研究者に質問事項(参考)を照会し、当日はその事項に沿って進めています。



インタビュー - 者  
Ingela Wahlgren 氏

##### ~ インタビュー者の紹介 ~

Ingela Wahlgren 氏 (1953年4月29日、スウェーデン人)  
国立労働生活研究所

- 1) 研究分野: 高齢者介護、ホ - ムヘルプ - サ - ビス、労働環境。
- 2) 博士の学位:  
1996年、ストックホルム大学で「Business Administration」の博士取得。
- 3) 渡日経験  
JSPS事業での渡日経験  
2004年3月に、外国人招へい(短期)事業で渡日。受入研究者: 斉藤弥生助教(大阪大学)  
【研究テ - マ】  
「高齢者介護におけるサ - ビス事業者の多元化と自治体の役割(日本とスウェーデンの比較において)」  
受入研究者の斉藤弥生先生ほか多くの研究協力者と介護保険、社会保障制度についての研究討議、意見交換を行う。このほか高知女子大学での講演、金沢市等の行政や神戸、上野、北海道のグル - プホ - ムやディサ - ビスセンタ - などの多様な介護サ - ビスの現場を視察。  
フェロ - 期間: 約1ヶ月。

2月23日(水)10時より、同窓会会員のうち唯一の社会福祉専門で、現在、国立労働生活研究所に勤務(本職は、スウェーデン社会庁医療保険局高齢者部プロジェクト担当)している Ingela Wahlgren 氏を訪問し、インタビューを実施しました。

インタビュー - 者の Ingela Wahlgren 氏は、1996年の渡日を契機に、大阪・立命館・京都大学等で高齢者介護についての講義依頼や学会・セミナーへ出席し、1998年には、共同調査で金沢大学に訪問しており、現在、日本における高齢者介護、労働環境、歴史、文学から日本庭園等の伝統文化、すもう、レス



(国立労働生活研究所)

リング、卓球等のスポーツに至るあらゆる分野に関心を持ち、日本への理解に対する努力を惜しまない親日家でした。

Ingela Wahlgren氏は、1998年に、金沢大学や先駆的な取り組みをしている金沢市で介護保険制度についての意見交換を通じ、日本における介護保険に関心を持ち始め、研究協力者の紹介で大阪大学の斉藤弥生先生に知り合い、JSPSフェロ・シップ事業の紹介があり、2004年3月に研究テーマ「高齢者介護におけるサ・ビス事業者の多元化と自治体の役割(日本とスウェーデンの比較において)」の調査で再訪されています。

約一ヶ月の短期間の滞在の中で、受入の大阪大学の斉藤弥生先生ほか、北海道大学の宮本太郎先生、倉田聡先生等多数の研究協力者を訪問し、両国の高齢者介護・社会保障制度についての研究討議をされています。また、高知女子大学で社会福祉、看護両学部の学生や教員約50名を前に「スウェーデンにおける介護サ・ビス従事者(パートタイム)の労働環境の現状」についての講演されています。



(高知女子大学で労働問題について講演をする Ingela Wahlgren氏)

この他、金沢市役所、北海道の町役場などの国内の行政での介護保険事業についての意見交換や、神戸の痴呆性高齢者向けグル・プホーム(社会福祉法人光会)、上野のデイ・サ・ビスセンター(社会福祉協議会)等の多くの介護サ・ビス事業者を訪問し、現場視察し、日本のグル・プホームの現状や、市民参加型のデイ・サ・ビスの現状、今後の展望について意見交換をされています。

同氏は、受入研究者の斉藤先生と以前よりスウェーデンの介護サ・ビス供給の多元化について共同で調査を行っていましたが、今回のJSPSフェロ・シップ(招へい短期)事業の成果として、以下の2点を挙げられました。

- 1)外国で入手できる日本の高齢者介護保険関連の情報は極めて限られているため、今回、日本国内の行政やサ・ビス事業者を数多く訪問し、介護サ・ビス従事者、サ・ビスを受けている高齢者の双方の生の意見を直に聴くと共に、充実した意見交換ができ、今後のスウェーデンと日本の介護システムの比較研究における議論の土台をつくることができたことは大変意義のあることであった。
- 2)受入の斉藤先生の紹介で、北海道大学ほか国内の多くの研究協力者と研究討議ができたと共に、高知女子大学での講演、大阪大学や金沢大学での大学院生、ポスドクの学生との意見交換を通じ、学生の今後の研究意欲の促進、ゼミ室の活性化にもつながる効果があり、日本の研究者のみならず学生にも貢献できたこと。

同氏の話から当フェロ・シップ事業を通じて、約一ヶ月の短い滞在期間中に、日本の現地情報を得て、日本についての高齢者介護の理解を深めることができただけでなく、スウェーデンの情報を日本の研究者、学生、介護現場の職員の方々に提供するなど、相互の意見交換ができ、密度の濃い渡日経験であったことが伺えました。

さらに、JSPS事業については、大変協力的な受入の先生のもとで、期待通りの成果が達成できたと感謝しており、今回の来日を通じて、相互の情報交換ができたことは、当事業が両国の社会に果たす役割が大きいとおっしゃり、将来にわたる新たな共同研究の創出につながるすばらしい事業であったと評価されました。また、日本での研究を考えている研究者に対するメッセージとして、日本での研究は、言語の問題など壁があるものの、日本との共同研究をする価値があると語られ、今後も多くの研究者が当事業を通じて、共同研究が実現できることを期待していると、おっしゃいました。

同氏は、フェロ・シップ終了後も、両国が共通して直面している超高齢社会に伴う高齢者介護の問題を、社会的背景が異なる日本と比較検討し、受入の斉藤先生ほか多くの日本人研究協力者、学生と情報交換をし、両国の高齢者介護の質の向上を図っており、一例として、スウェーデンに留学した日本人学生が、スウェーデンのグル・プホームの利点を日本の施設に導入している様子を語られました。また、受入の斉藤先生とは、近い将来、共同執筆で研究論文を作成し、北ヨ・ロッパ学会、日本社会福祉学会等の学会誌に投稿する予定でいらっしゃいます。

さらに、同窓会活動については、2005年2月に出席した総会の感想として、同じ専門分野の会員と有益な情報交換ができたことに感謝される共に、当センターに対しては、フリ・ディスカッション等の会員の意見交換を通じ、会員の要望をその後の活動にフィードバックし、活動の促進につなげて欲しいとおっしゃり、今後もこのような会員同士が集まる場を提供していただきたいと述べられました。

また、総会に併せて開催した第一回セミナー「日本における高等教育」（講師：当センタ - 水田事務官）については、大変興味深く、今後もこのようなセミナーを定期的で開催することで日本に対する理解が深まり、瑞日の学术交流が促進するであろうと、おっしゃりました。

そして、セミナーのトピックの要望としては、同窓会会員中に社会科学系が少ないものの、現在、両国が直面している共通の課題である社会保障制度、高齢者介護などの分野での開催を期待しているとおっしゃりました。

さらに、同窓会のホムペやニューズレターにおいては、JSPS 事業での研究成果のみならず、日本の社会、文化など多方面な情報を掲載することで、瑞日交流が促進されるのではないかとおっしゃりました。また、コンタクトパソン活動に対しては、個人的にはスウェーデン研究者のみならず、スウェーデンでの研究を予定・希望している日本人研究者、学生に対しても、良きアドバイスが可能であり、問い合わせを歓迎するとおっしゃり、多忙ではあるものの、コンタクトパソンとして、スウェーデンと日本との学術・研究者・学生交流のキパソンとして活躍したいとおっしゃりました。

約2時間に及ぶインタビューの後で、階下にある図書館を案内していただき、最後に、今後もコンタクトパソンとして、当センタと緊密に連絡をとりながら、協力して同窓会を支援していく旨を確認しました。（土屋）

## 5. コラム

今月はコラムとして、「ストックホルムの冬」についてご紹介します。

### ～ストックホルムの冬～

一般的にスウェーデンの冬というと、暗く厳しい寒さをイメージしますが、今回はスウェーデンの冬の実態についてご紹介したいと思います。

スウェーデンは高緯度の割には、メキシコ暖流がスカンジナビア半島の沿岸を流れているため、イメージされているほど寒くないといわれています。温度計が氷点下をさして雪が降っていても、風が吹かないためか温度の割にはそれほど寒く感じないこともよくあります。近年は暖冬傾向が続いていますが、年によってはストックホルムでも気温が -20 位になることもあるそうです。昨年、ストックホルムでは11月の中旬に初雪が降りましたが、10月には冬のコートを着たり、マフラーや手袋をしたりする人が目立ち始め、初雪が降る地域もあります。日本と比べて秋の期間が短く、11月には紅葉が終わり、木々は枯れ木になります。

スウェーデンの冬で多くの人が憂鬱に感じるものは、冬の暗さです。夏が終わり、9月ともなると日ごとに日照時間が短くなります。夏の日照時間が長かっただけに、この変化は一種の寂寥感や陰鬱さを感じさせます。12月は一番日照時間が短い月で、ストックホルムでは、冬至の頃には9時頃日の出、3時頃日没になります。このような暗く寒い12月を乗り越えるために、スウェーデンでは「ルシア祭」と「クリスマス」が重要な行事になっています。まず12月の最初の日曜日になるとオフィスや家庭の窓辺に星型のライトやキャンドル・スタンドが飾られ、各地でクリスマス・マーケットが開催されます。

12月13日のルシア祭では、学校、会社、町で光の聖人ルシアに選ばれた女の子が、白い衣装に真紅の帯をつけ、冠を頭にのせてコーヒー、サフランパン、ジンジャークッキーを配ります。ルシアの後には白い衣装を着た少女と金の星のついた三角帽をかぶった少年が従い、皆で「サンタルシア」などのルシア祭の歌を合唱します。このルシア祭は本来、イタリアのシシリー島の聖ルシアを祝う日でした。スウェーデンでは一年中で最も夜が長いと考えられていた日で、1927年にストックホルムの新聞が市を代表するルシアを選んでから、この行事は全国に広まっていきました。ルシア祭当日は各地の教会で、ルシアコンサートが開かれます。



（ルシア祭の様子）

スウェーデンのクリスマスは家族で祝う伝統行事で、特にクリスマス・イブを盛大に祝います。イブとクリスマス当日には多くの店が休業になり、街はひっそりと静かになります。クリスマス・イブは家族揃ってユールボードとよばれる酢漬けニシンやミートボールなどのクリスマスの食事を食べたり、ディズニーのテレビ番組を見た後プレゼントを交換したりします。クリスマスの朝には、早朝のミサのために教会に出かけ、その日は静寂と休息の日として静かに過ごします。スウェーデンでクリスマスのお祝いが終わるのは、クヌートの日と呼ばれる1月13日で、家庭や職場で飾られていたクリスマスツリーやキャンドルを片付け、すべてのクリスマスの行事が終わります。この時期スウェーデンに滞在していると、長く暗い冬を過ごす北欧の人達にとって、クリスマスの持つ意味や役割がいか

に大きいかを実感します。クリスマス休暇には、太陽を求めて暖かい南国に避寒する人も多く、昨年のスマトラ沖地震による津波では大勢のスウェーデン人犠牲者がでました。

新年が明けると、スウェーデンのお菓子屋さんやカフェにセムラ (Semla) とよばれるお菓子が並び始めます。セムラは、丸いパンをくりぬいたものに、アーモンドペーストを塗り、その上に生クリーム、パンの上部をのせ、上から粉砂糖をふりかけて作ります。これは宗教改革の前に、イースター直前の四旬節 (四十日間) に断食をしていたころ、告解火曜日にセムラを食べた習慣の名残です。

2月には湖が凍り、各地でスケート、スキーやアイスホッケーの国際試合が行われます。また全国の学校ではスポーツ週間が定められていて、子供達はウィンタースポーツを十分に楽しむことができます。(澤登)

参考文献 スウェーデンハンドブック 早稲田出版部 岡沢 憲英・宮本 太郎 編

## 【編集後記】

### ~ 海外研修を振り返って(感想) ~

この1年間の海外研修を振り返ると、生活面では、憧れの国ストックホルムに一年間在住することで、改めて福祉に行き届いたバリアフリーな都市景観やジェンダーフリー男女平等社会が人々に心の豊かさをもたらしていることを実感し、福祉国家スウェーデンの住み心地のよさ、日本との相違点や類似点が具体的に見えてきました。

また、当センターで、サイエンスフォーラム・コロッキウムほか同窓会組織化の支援活動等の様々な業務に携わることで、日本と遠く離れたスウェーデンとの学術・研究者交流の促進に、当センターがいかに重要な役割を果たしているかということを感じました。

とりわけ、年間を通じて携わってきた同窓会組織化の支援活動を通じ、フェロシップを中心とするJSPS事業が両国の学術・研究者交流の促進に大きく貢献している点を再認識すると共に、同窓会会員のインタビューや研究施設の見学を通じ、瑞日の研究環境の違い、両国の大学教育、福祉制度の比較や考察を行うよい機会となりました。

今後は、JSPS事業経験者の要望や意見をフィードバックし、事業全体の改善につなげていくと共に、当センターに対し「瑞日の共同研究の促進につながる活動」を期待している同窓会会員が多くいる中、引き続き、役員と協力して瑞日交流を深めるセミナーの実施、30人に及ぶコンタクトパソン活用、ホームページやニューズレターによる渡日経験者の日本での研究成果を広く公開するなど、個々の活動を充実させ、本同窓会組織が瑞日の研究者交流の核となるネットワークに発展するよう、努力していくことが大切であると思います。

さらに、日本の大学においては、瑞日交流ほか我が国と諸外国の国際交流がますます活発になるよう、ホームページやあらゆるメディアを有効活用し、日本の学術情報の発信を積極的に行っていくことが重要であると思います。帰国後は、研修の成果をいかし、外国人研究者のニーズを踏まえた、きめ細かい事務サポートを心がけ、引き続き国際交流事業に貢献していきたいと思っています。(土屋)

監修: 岡崎 恒子 (ストックホルム研究連絡センター - 長 E-mail: [it-okazaki@jspss-sto.com](mailto:it-okazaki@jspss-sto.com))

編集長: 水田 功 (ストックホルム研究連絡センター - 事務官 E-mail: [i-mizuta@jspss-sto.com](mailto:i-mizuta@jspss-sto.com))

編集担当: 土屋 友紀 (研修生 E-mail: [gakushin3@jspss-sto.com](mailto:gakushin3@jspss-sto.com))

執筆: 水田 功、土屋 友紀、澤登 ゆり子 (研修生 E-mail: [gakushin2@jspss-sto.com](mailto:gakushin2@jspss-sto.com))

JSPS Stockholm office, Fogdevreten 2, S-171-77 Stockholm, Sweden

TEL +46 08 5088 4561 FAX +46 (0)8 31 38 86 <http://www.jspss-sto.com>